

## 論文の内容の要旨

論文題目 歴史なき人びとの歴史実践ーホンジュラスの逃亡奴隷ガリフナ

氏 名 金澤直也

本研究の目的は、中米ホンジュラスで黒人とよばれる人びとが、カリブ海小アンティル諸島のセントビンセント島に由来するエスニック集団ガリフナを名のる社会背景を検討することである。

1990年代以降急速に進んだ中米黒人史研究から、ホンジュラスに植民地時代から20世紀初頭まで黒人とみなされるさまざまな出自の人が流入していたことがわかる。しかしながら、現在、ガリフナ以外の出自を主流社会で名のる黒人とよばれる人の動きはない。他方、ガリフナといわれる人びとは世代をこえて受けつぐ歴史をもたず、歴史なき人びとといわれてきた。なぜ、ホンジュラスで黒人とよばれる人びとはセントビンセント島にルーツがあるガリフナを名のるのか。なぜ、黒人とみなされる人びとがガリフナに収斂するガリフナ化 *garifunized* が起きているのか。

本稿では、ホンジュラスで黒人といわれる人びとがセントビンセント島に由来するガリフナを名のるガリフナ化の社会背景を分析するために、名和克郎の「民族論的状况」というつぎの理解をもちいる。「民族は実体として存在せず、『名』と実体をめぐる民族論的状况のみが存在する」(名和 1992: 297)。この理解にもとづいて、黒人といわれる人びとがガリフナに収斂するガリフナ化のプロセスを名のる側だけでなく、名づける側からも問いなおす。

本研究のおもな分析対象は人種概念をめぐる利害関係の歴史である。本稿でもちいる人種概念は、竹沢（2005: 29-31）の3つの人種概念に依拠している。ひとつは世代をこえて継承される人種概念である「小文字の race」。もうひとつは科学的な人種概念である「大文字の Race」。最後は、「抵抗の人種 Race as Resistance」という社会で劣位の人種とされたマイノリティが支配へ抵抗するなかで、あたらしい積極的な意味を与えた人種概念である。

第1章では、ガリフナ化を名づけの観点から分析した。研究者はどのように黒人とよばれるガリフナを調査地にいる黒人とみなされるさまざまな出自の人から区別し、ガリフナと名づけてきたのか再検討した。つまり科学的な人種概念「大文字の Race」が分析対象であった。まず、研究者がガリフナとみなす人びとを表すと説明してきた歴史資料に書かれた人種・民族用語「カリブ」、「ブラック・カリブ」、「モレーノ」を分析しなおした。検証からこれらの名称はカリブ海地域や中南米、フィリピン諸島で用いられており、ガリフナと考えられている人びとを特定する名称ではない可能性を示した。

つぎにフィールド調査を検証した。ガリフナ語という言語にもとづいて、黒人に分類されるさまざまな出自の人からガリフナとみなす人を析出する方法を問いなおした。調査から、今日では英語を話すガリフナやガリフナ語を話さないガリフナといわれる人がおり、言語は判断基準にならないことをしめした。民族の境界は社会環境の変化にともないかわっており、黒人とみなされている人を研究者がガリフナと名づけるガリフナ化の前提は今日揺らいでいる。

第2章では、ガリフナ化が起きている調査地に流入した黒人とみなされる人の多様な歴史を植民地時代までふりかえった。植民地時代、調査地にスペイン人やイギリス人、フランス人が人口の少ない先住民のかわりに労働力として奴隷化された黒人をアフリカ大陸や西インド諸島から導入していた。20世紀初頭、調査地一帯で英語話者の黒人移民が国民国家統合上の問題になり、英語話者黒人の排斥運動がおきていた。以来、世代をこえて継承される優劣や排除をとまなう人種概念「小文字の race」と、優生学という科学的な人種概念「大文字の Race」にもとづく国民国家統合理論「混血思想」が原因で黒人とみなされるさまざまな出自の人は黒人と一括され、歴史なき人びとといわれ等閑視されてきた。

ところが1990年代後半、黒人として一括されてきた人びとのあいだに違いが生じる。ガリフナといわれる人は「我われのルーツ」とメディアで報じられ、「我われ」を名のる多数派の混血の人びとの構成要素とみなされるようになった。一方、英語話者黒人と認識される人は自他ともに認める「よそ者」であり続けている。ガリフナ化が起きている調査地には、ガリフナに分類される人を主流社会の一員とみる一方、英語話者黒人と考えられる人を「よそ者」とみなし、ガリフナと英語話者黒人以外の黒人とみなされる人の過去を等閑視する混血思想にもとづく地域の歴史があった。

第3章では、世代をこえてうけつぐ歴史をもたなかった黒人とみなされる人びとが1970年代、セントビンセント島にルーツがあるガリフナを名のり、ガリフナとして自分たちの歴史をつくりはじめるガリフナ化の萌芽期を記述した。1976年以来国立民俗舞踊団代表を

つとめ、ガリフナ文化の啓蒙活動に従事してきたクリサント・メレンデスの活動を取りあげた。歴史家でもあるメレンデスは 1970 年代、欧米の歴史研究を利用して自分たちの歴史を語りはじめ、歴史なき人びとみなされ受けつぐ歴史をもたないガリフナといわれる人びとの歴史をたちあげる機会をつくった。

留意すべきは、メレンデスは主流社会の混血思想に迎合する形でガリフナ文化を表現してきたことである。メレンデスはガリフナ文化の混血性を強調し、黒人であることや差別の問題にあからさまにふれず、体制の枠組みのなかでガリフナ文化の存在を主張することで、権威主義的な政治体制がしかれていた 1970 年代以来 40 年以上にわたりガリフナ文化を普及し続けることを可能にしてきた。黒人とみなされる人がガリフナを名のるガリフナ化は主流社会の理解にしたがうかたちでおきてきたのである。

第 4 章では、1990 年代に黒人といわれる人がガリフナを名のり権利を請願するガリフナ化が進展した外的要因を分析した。1990 年代、世界銀行をはじめとする国際機関は人種や民族にもとづく差別を国や地域の経済発展を疎外する要因とみなし、各国に多文化主義的政策の導入をすすめた。1995 年、ホンジュラス政府は少数民族を対象にする多文化主義的開発プロジェクト「我われのルーツ」を開始した。

政府と国際機関の多文化主義的な開発プロジェクトにともない、ガリフナ文化だけでなく、ガリフナ共同体の土地も観光資源として注目され、ガリフナとよばれる人びとの社会進出がすすんだ。しかし同時に、国際機関主導の新自由主義的な多文化主義的政策は、ガリフナ文化だけでなく、人びとや住む地域も商品化し、市場経済にとりこんだ。その結果、ガリフナといわれる人びとは土地と資源と権限をうばわれ、権利請願を活発化させた。

検証から、少数民族を支援する政府と国際機関の多文化主義的政策は、新自由主義的開発計画に対する少数民族の抵抗をおさえると同時に、少数民族が新自由主義の流れにくみこまれるように機能するネオリベラル多文化主義にもとづいていると主張した (Hale 2005: 13)。キムリッカの表現を借りれば、マイノリティのシティズンシップを犠牲にして市場経済を促し、国の連帯を犠牲にしてマイノリティを包摂する「連帯のない包摂」といえる。そしてまた、市場経済のためにマイノリティを犠牲にして国を連帯させる「包摂のない連帯」といえよう (Kymlicka 2013: 119; 2015: 8)。

第 5 章では、1990 年代に黒人とよばれる人がガリフナを名のり権利を請願するガリフナ化が盛んになる内的要因を分析した。まず、観光開発が原因で土地を奪われた黒人たちがガリフナを名のり、ガリフナの歴史を根拠にして、先住民の権利を保障する国際法 ILO 第 169 号条約にもとづいて共同体の土地所有権を請願する経緯を検討した。

ガリフナ組織が同条約に依拠する理由はふたつある。ひとつは植民地時代の 1797 年にセントビンセント島からホンジュラスに上陸したとされるガリフナは同条約がさだめる「先住民族」として権利が保障されるからである。もうひとつは、黒人とみなされる人は国家の法観念から排除されてきたことがあげられる。

つぎに、先住民を名のるガリフナの人びとを取りあげ、1990 年代にグローバルな「抵抗

の人種」とみなされるようになった先住民という概念が黒人とよばれるガリフナにおよぼす影響を考察した。1990年代はじめまでホンジュラスで先住民という概念は権利請願の名称ではなかった。しかし、南北アメリカ大陸における先住民運動の影響をうけ、少数民族のなかで最大の人口をしめるガリフナといわれる黒人を先住民と連帯させるために土地に根ざした人を意味する土着民という用語が権利請願の名称としてとりあげられた。その後、先住民は人種にもとづく名称として、土着民は文化にもとづいて土地に根ざした人をあらわす名称として民族運動関係者だけでなく、権利請願にかかわらないガリフナを名のる人びとに浸透した。土着民という名称はグローバルな先住民運動の影響をうけてひろがった草の根の「抵抗の人種」といえる。

ガリフナといわれる人が名のる土着民という名称には、ディアスポラの境遇にあり、歴史なき人びとといわれてきた黒人とみなされる人が土地に根ざした歴史観を構築するプロセス、「黒人の先住民化」が表れている。すなわち、土地に根ざした人を意味する土着民を名のり、ガリフナの歴史を根拠にして共同体の土地所有権を請願する黒人とよばれる人のガリフナ化には「黒人の先住民化」、歴史なき人びとの歴史のおわりとはじまり、ディアスポラの終焉が示されているといえよう。

以上のとおり、ホンジュラスで黒人とよばれる人がセントビンセント島にルーツをもつガリフナに収斂するガリフナ化は、黒人とみなされる人を包摂し排除する国民国家の枠組みのもと、黒人といわれる人びとがホンジュラスとカリブ海地域に根ざした自分たちの歴史をつくりあげるなかでおきてきたのである。